

## オー・トゥク・ビル小学校の竣工・贈呈式に参加して

近藤 彰介

カンボジア王国バタンバン州サンパウ・ルーン郡クレイ・セマ集合村 オーカック村という、隣国タイとの国境に近い村にその小学校はあった。教員と児童の数は295人、その地域の住民は1437人。2部制（教室、教員不足などのため午前、午後に分けて授業）による学年は、合計6クラスで、午前中3クラス（1，3，5年生）、午後は残りの3クラス（2，4，6年生）の授業を行っている。

私たち5人は、2月13日の日曜の朝7時過ぎにバタンバン州の州都にあるホテルを4輪駆動で出発。途中30分ほどの休憩と待ち合わせの後、10時半過ぎに学校に到着。幹線道路から右折し、未舗装の大変なデコボコ道をゆっくりと走っている間に、式典参加者の4駆の車列は、8台ほどにもなっていた。

校門の前には、多くの児童たちが整列し、「こんにちはーこんにちは」と言って歓迎してくれる。10分ほどすると、このような僻地では初めてのことが、州の副知事が来賓として到着したので、皆順次、会場に入り、僧侶の読経から始まり式典が開始された。

式典で特に印象に残ったことは、

- ・州の副知事の挨拶の中で、立派な校舎が日本の方々のおかげで完成したのだから是非、児童を学校に通わせて欲しい（家庭の事情で当校しない児童や、5年、6年生になると家で働くか、タイへ働きに出る児童が多い）、児童に薬物を使用させないようにとの発言があったこと
- ・3つの立派な教室ができたが、この地域には電力が来ていないため天井の高い屋根に、瓦2枚分ほどの明かり取り、いわゆる天窗を設けていること、両側の壁には大きな開口部を設けていること（窓ガラスはない）
- ・履物を履いていない児童が、多く見受けられたこと
- ・児童の頭髮に部分的に、金髪のようなものが見受けられたこと、現地のNPOの人に聞くと栄養不足によるものだとのこと
- ・遊び時間には、4人ぐら이가座り込み、輪になり日本のお手玉のような遊びをしているが、お手玉に角張った石コロを使っていたこと
- ・セカンドハンドがプレゼントした紙風船上げに、いつまでも児童たちが興じていたこと

式典と交流行事は、午後2時半に盛会のうちに終了し、帰途に就くが、未舗装の帰り道には何の目印もないため、シエムリアップで雇った運転手も、どの道が

来た道なのか迷うほどだった。

幹線道路沿いには、日本企業などの支援による学校も見受けられたが、あまり支援の見込めないこのような奥まった地域にこそ、支援の手は必要だと思った。

今回のカンボジア視察では、この竣工式のほかに、前日の午前には、ホームランド(孤児院)の視察をした。訪問当初は、職員以外児童の姿は見えなかったが、昼前には10人余りの子供たちが食事などのため集まってきた。

現地の事情も変わり、孤児を収容する需要は少なくなっているように見えたが、里子の状況を把握する拠点としては大切だとも感じた。今後の支援のあり方は検討する必要があると思う。

その日の午後にはラチャナ・ハンディクラフトの工房も視察した。6人ほどの織職人や店員がおり、丁寧な作業を行っていた。皮の青いバナナを頂いたが、そのおいしさに感動した。

私にとってカンボジアは、ポルポトによる虐殺のあった国、セカンドハンドが何か支援をしている国、元赤十字病院の看護師の楠川さんが移住し医療衛生面の支援をしている国、日赤県支部の大林さんが赤十字救急法の指導に行った国という程度の理解しかなかった。今回初めて、現地を訪れる機会を与えられ、カンボジアの人たち、カンボジアを支援するNPOの人たち、これから発展しようとする国の状況に接し、これまでセカンドハンドの先輩たちが行ってきた支援活動の大切さ、意義について考えさせられた視察旅行でした。三木さんをはじめ、同行の皆さんのおかげで、シェムリアップ空港に到着後の初体験のビザ申請もスムーズに済み、全行程にわたり体調も崩さず帰国でき、感謝しています。